

## 釧路空襲体験談

百川 信子

釧路空襲が起きたとき、私は旭小学校5年生の11歳でした。旭小学校にも防空壕はありましたが、全員が入れるほどの大きさはなかったため、警戒警報が鳴ると下校していました。防空頭巾は通学するときも生活のときも、リュックと同じように必ず持ち歩いていました。父は国鉄の職員として市役所に勤めていたので、自宅は鉄道官舎でした。

7月15日の朝4時半から5時頃に警戒警報が鳴り、空襲警報に変わりました。防空壕は1畳ほどの広さで、木の柱と扉で支え、空気穴の煙突が付いていましたが、今思えば爆弾が落ちたら全滅していたような、心もとない造りでした。兄が外をのぞくと戦闘機が通り、グラマンなどの名前を口にしていました。B-29が近くに来ると空が暗くなり、兄は「操縦士の顔が見えた」と話していました。戦闘機が編隊を組んで来る様子も見ました。爆撃が落ちると地雷のような音と揺れがあり、砂がさらさら落ちてきたのが怖かったです。防空壕の中では、音が聞こえるたびに、いつ死んでもおかしくないと恐怖を感じていました。

朝5時頃からお昼の11時頃まで防空壕に避難し、お昼ご飯は母が麦飯のおにぎりを握ってくれました。外に出たときの景色は、あたり一面が火事に包まれていて、鉄道官舎だけが残っていました。釧路空襲では、黒金町、川上町、末広町、旭小学校、国鉄の工機部（現在の浪花町十六番倉庫）に爆弾が落ちました。末広にあった映画館などが半分ほど焼けてしまったことと、幣舞橋の欄干が爆撃の影響でなくなったのを覚えています。

防空壕に入る前、空を見上げると、戦闘機から焼夷弾（火事を起こすための爆弾）が螺旋状に、シュルシュルと音を立てて落ちていく様子を見ました。弾には片びらのような羽が付いていて、螺旋を描くような構造になっています。爆弾が落ちるような映像を見ると、あの音を思い出してしまうので、映画もニュースも映像はいまだに見られませ

ん。怖いというより、フラッシュバックに近いです。

空襲後の街は、北大通を馬車が行き来し、魚や食材、荷物を運んでいました。初めて車を見たのは、中学生くらいの頃です。当時のバスは木炭で走っていました。

旭小学校は焼失してしまい、児童は弟子屈や川湯へ分散されました。自分と弟は祖父を頼りに芽室へ疎開しました。疎開先では友人と離れてしまったので、早く帰りたいかったです。芽室までの移動は、まず新富士駅まで歩き、そこから汽車の荷台に乗って行きました。兄は学徒動員の対象だったので、家から離れたところにいました。終戦が遅ければ、戦地に向かっていたと思います。現地では、食料調達のために畑で働き、イモや麦ばかり食べていて苦労したと言っていました。

疎開先の芽室は農家で米も育てていたの、食に不自由は感じませんでした。祖父の家でとうきびご飯を食べました。干したトウモロコシと一緒にご飯を炊くと甘みが出ておいしかったです。甘いものを食べたいときは砂糖が貴重だったので、ビートを煮詰めて食べていました。丹切飴という、でんぷんとビートで作った手作り飴を祖父が作ってくれました。

近くにあるスモモの木に登って実を採ろうとしたときにスカートを破いてしまい、怒られたのを覚えています。子どもの頃は本を読みたかったけれど、子ども向けの本はなく、田舎で図書館もなく、大人の本を読むと怒られるので苦労しました。疎開先のクラスは3学年が同じ教室で、先生が順番に回って教えてくれていました。男の先生は軍に召集されていたので、女性の先生ばかりでした。

終戦の日の12時頃、学校に残るように言われて、昭和天皇の玉音放送を学校で聞きました。ラジオの内容は何もわからなかったですが、先生が分かりやすく伝えてくれて、日本は敗戦して終戦ということを理解しました。先生が涙を流していたのが印象に残っています。

終戦からひと月も経たない頃、軍艦からアメリカの進駐軍が釧路の街に来ました。マ

ッカーサーが東京に着いた後くらいのことです。進駐軍はサーベルと銃を下げていました。

中学生になるタイミングで旭小学校から召集がありましたが、疎開先で進学する人が多く、1クラス50人のうち10人ほどしか集まらなかったです。友人の中には、疎開先で「都会から来た子」と見られ、いじめられていた子もいました。早く釧路に戻りたかったと話していました。後に、大楽毛の人々は空襲のことを知らないほど被害がなかったと聞きました。

兄や姪には戦争の話はほとんどしませんし、小学校の同級生の中でも、昔の話を思い出したくないからと嫌がる人もいました。戦争はもう二度と経験したくないです。ウクライナなど戦地の様子を見ていると、気持ちが分かる気がします。いまだに戦争関係のテレビを見ると思い出してしまうので、映ると変えています。